

(9月29日)「出エジプト記20:18~21」

モーセは民に答えた。「恐れることはない。神が来られたのは、あなたたちを試すためであり、また、あなたたちの前に神を畏れる畏れをおいて、罪を犯させないようにするためである。」  
(出エジプト記20章20節)

・映画などで神さまが登場する場面では、雲が広がり、突風が吹き、雷が落ち、豪雨に見舞われ、とそのようなイメージが多いように思います。仏教では仏様が来られるのはさわやかな日差しの中という描かれ方がほとんどのような気がします。

・今回神さまは、人々に恐れを抱かせるためにこのような「演出」をされたようにも思います。実際民は、見て震え、遠く離れて立ったそうです。そしてモーセに、自分たちと神さまとの仲介をするようにと願います。

・ただこの神さまのやり方には、ちょっと首をかしげてしまいます。どうしても守って欲しいことがあるとき、「守らなかったらどんなに怖い目にあうか」想像させて守らせる方向に持っていつているように思えるからです。

(9月30日)「出エジプト記20:22~26」

あなたたちはわたしについて、何も造ってはならない。銀の神々も金の神々も造ってはならない。  
(出エジプト記20章23節)

・ここから聖書は、「契約の書」の内容に入っていきます。これがここから23章まで続いていきますが、みなさんのうち誰も「日ごとの聖書」通読から脱落しないようにと願うばかりです。(わたしも含めて)

・銀の神々、金の神々を自分のために造るという行為は、異教の神にひれ伏すということを示します。十戒でも第一、第二は「他に神があってはならない」、「像を造るな」でした。神さまとの関係を正しく保つこと、そのことがとても大事なのです。

・また「焼き尽くす献げ物(いけにえ)」という言葉がここから登場します。焼き尽くすというのは、ささげる物を黒焦げにすることです。人間には食べるどころが残されない、つまりすべてを神さまにささげる、絶対服従の思いが込められているのです。

## 創世記・出エジプト記 通読

9月



(9月 1日)「出エジプト記 13 : 11~16」

ただし、ろばの初子の場合にはすべて、小羊をもって贖わねばならない。もし、贖わない場合は、その首を折らねばならない。あなたの初子のうち、男の子の場合にはすべて、贖わねばならない。(出エジプト記 13 章 13 節)

- ・「贖い」という言葉が出てきます。あまり日常では使われない、いわゆる「キリスト教用語」です。聖書では人手に渡った財産や土地に対して賠償金を払って買い戻すことや、身代金を払って奴隷を自由にするという意味で使われます。
- ・さらに罪の償いのための犠牲など、さまざまなささげ物をささげることにも「贖い」という言葉が用いられます。そしてここでは初子をささげることによって、イスラエルの人々が死の中から救い出されるというのです。
- ・この出来事は、イエス様の十字架にもつながっています。神さまは独り子であるイエス様を十字架につけられました。その血によって、わたしたちは生きる者とされました。そのただ一度の死によって、わたしたちは贖われたのです。

(9月 2日)「出エジプト記 13 : 17~19」

神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。(出エジプト記 13 章 18 節)

- ・ペリシテ人はカナン地方の沿岸に住んでいました。彼らは体格が良く、鉄製の武器も使っていたようです。戦いにも慣れていた彼らを見ると、イスラエルの人々は恐れるだろうと神さまは考えました。
- ・そこで遠回りですが、神さまは葦の海に通じる荒れ野に民を導きました。イスラエルの人々はずっとエジプトの奴隷として働いていたので、戦いを仕掛けられたらひとたまりもなかったでしょう。
- ・さてモーセは、ヨセフの骨を携えていました。イスラエルの人々がエジプトに来てから 430 年が経っていました。それだけの長い年月を経ても、先祖の墓に葬られることはとても重要なことだったのです。

(9月 27日)「出エジプト記 20 : 7~11」

六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。(出エジプト記 20 章 11 節)

- ・次に第三、第四の掟です。一つ目は、主の名をみだりに唱えるなどというものです。ここで禁止しているのは、神の名にかけて誓う行為です。けれども神さまの名前自体を呼ぶことすらダメだと解釈してしまい、その読み方がわからなくなってしまったという歴史もあります。
- ・そして安息日の規定です。聖書にあるとおり、天地創造の場面で神さまは七日目に休まれたので、その日を聖なる日として聖別されました。この日は奴隷も家畜も含めて、安息が与えられる恵みの日でした。
- ・しかし「いかなる仕事もしてはならない」という言葉が強調されてしまい、安息日には人の目を気にしながら、窮屈な思いで過ごす人々も多くなっています。のちにイエス様は、安息日の本当の意味を回復されていきます。

(9月 28日)「出エジプト記 20 : 12~17」

あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。(出エジプト記 20 章 12 節)

- ・娘が幼稚園の頃だったでしょうか、旅行先で訪れたカトリック教会に「み言葉おみくじ」というものがありました。娘が引いたところ、出てきたみ言葉は「あなたの父と母を敬いなさい」でした。思わずガッツポーズをしたものです。
- ・十戒の最初の 4 つが神さまとの関係についての掟だったのに対し、後半の 6 つは人間関係に関するものとなっています。父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、むさぼるなという掟は、わたしたちの周りにある法律に近いものがあるようにもみえます。
- ・しかし新約聖書の中でイエス様は、これらの掟は決して法的なものだけではないと言われます。ばかといっただけで殺したことになる、情欲を持った目で他人の妻を見たら姦淫したことになる、そうイエス様は人々に教えられます。

(9月 25日)「出エジプト記 19 : 20~25」

モーセは主に言った。「民がシナイ山に登ることはできません。山に境を設けて、それを聖別せよとあなたがわたしたちに警告されたからです。」

(出エジプト記 19 章 23 節)

・神さまはまずモーセを呼び寄せました。そして民には近寄らないように命じます。すでに山には境が設けられ、聖別するように命じられていたので、当然民は近づくことができないのにもかかわらずです。

・今日の箇所を見ると、神さまは民がご自分に近づいてくることを、とても嫌がっているようにも感じます。モーセとアロンはいいけれども、民が近づくことと殺すぞと警告されているのです。

・そこにはどのような思いがあったのでしょうか。「神を見たら死ぬ」とイエス様の誕生物語の時代にも信じられていました。「神、共にいまして」と歌うわたしたちには、少し違和感がある記述です。

(9月 26日)「出エジプト記 20 : 1~6」

あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。

(出エジプト記 20 章 4 節)

・ここから神さまは、「十戒」と呼ばれる掟を伝えていきます。今日の箇所には、第一と第二の掟が書かれています。掟を語る前に神さまは、「わたしがイスラエルの人々をエジプトから導き出した」と自己紹介します。

・第一の掟は。「あなたはわたしのほかに神々があってはならない」というものです。キリスト教が「一神教」と呼ばれる所以です。ただ聖書にはバアルの神などとの対決も描かれますので、「あなたにとって」ということが大切なのです。

・二つ目は像を造るなというものです。新しい聖書では、「自分のために」という言葉が入っています。文字通りに読むと、神さまを賛美するために造られたものであれば OK とも捉えることができそうです。

(9月 3日)「出エジプト記 13 : 20~22」

主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。

(出エジプト記 13 章 21 節)

・神さまはイスラエルの人々を導きます。昼は雲の柱として、そして夜は火の柱として彼らを導きます。このことはモーセやイスラエルの人々にとって、とても心強いことだったでしょう。

・「約束の地」と言われても、グーグルマップがあるわけではありません。また 60 万人という人が移動するわけです。遠くからでも見る事ができるし、あるしがあれば、人々は迷わなくてすむのです。

・ただ、夜も行進しなければならなかったというのは、大変だったことでしょう。毎日の宿営地選びも大変でしょうし、みんなついてきているのか、確認することも大変です。何もかもが大変な中、イスラエルの人々は出発したのです。

(9月 4日)「出エジプト記 14 : 1~4」

するとファラオは、イスラエルの人々が慌ててあの地方で道に迷い、荒れ野が彼らの行く手をふさいだと思うであろう。

(出エジプト記 14 章 3 節)

・驚くべきことに、神さまはイスラエルの人々にせっかく逃げてきた道を引き返すように伝えます。それは彼らが荒れ野で道に迷ったと思わせるため、簡単に言うとファラオたちを畏にかけるためでした。

・神さまはさらに、ファラオの心もかたくなにします。つまり明日以降の箇所に出てくる場面、エジプト軍がイスラエルの人々を追ってきたというのは、神さまのご計画だったということになります。

・聖書はこのように、「聖戦」という考えを支持しているようにみえます。それは旧約聖書に顕著に見られ、十字軍や対テロ戦争など、極端な思想を生み出していきました。わたしたちが聖書を読むときには、「敵を愛せ」と言われたイエス様の言葉を忘れないようにしましょう。

(9月 5日)「出エジプト記 14 : 5~14」

**主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。**

(出エジプト記 14 章 14 節)

- ・エジプトの王ファラオとその家臣たちは、イスラエルの人々をエジプトから去らせたことを後悔します。ただし昨日の箇所にあった通り、その根底には「ファラオの心をかたくなにした」神さまの存在があります。
- ・エジプト軍はえり抜きの戦車 600 台を始めとするエジプトの全戦車を集めました。いくらイスラエルの人々が 600 万人いたとしても、戦車の前に歩兵は無力です。彼らはこのままでは滅ぼされてしまうと叫びます。
- ・しかしモーセは、「恐れてはならない」と言います。モーセはイスラエルの人々に、「主があなたたちのために戦われる」と語ります。この箇所です聖書が伝えたいのは、この言葉なのです。

(9月 6日)「出エジプト記 14 : 15~18」

**杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。**

(出エジプト記 14 章 16 節)

- ・神さまはモーセに言われます。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか」と。ただし叫んでいるのはイスラエルの人々であって、モーセは「あなたがたは静かにしていなさい」とたしなめていましたが。
- ・神さまはモーセに、自分の杖を上げるように命じられます。海に向かって手を伸ばすと、海が二つに割れるというのです。にわかには信じがたいことを、神さまは告げられました。
- ・さらに神さまは、エジプト人の心までかたくなにします。この「徹底的に滅ぼす」という考え方は旧約聖書の随所に見られ、このことによって神さまは自らの栄光を示します。他の示し方があるように思ってしまうのは、わたしだけでしょうか。

(9月 23日)「出エジプト記 19 : 7~9」

**モーセは戻って、民の長老たちを呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語った。**

(出エジプト記 19 章 7 節)

- ・モーセは神さまが語られたことを、民に告げました。その内容は、「わたしに聞き従い契約を守るなら、あなたがたはわたしの宝となる」というものです。神さまの戒めを守るなら、神さまが自分たちを守ってくれるというわけです。
- ・イスラエルの民は、このモーセの言葉を聞き、神さまの戒めを守ることを誓います。これで契約が成立したのです。しかしこの契約は、いわば「条件付き」で神と民という関係になれるというものでした。
- ・旧約(古い契約)は、この関係が基礎となっています。神さまの戒めを守った正しい人だけが救われる、そのような考えだといってもいいと思います。しかし聖書を読み進めていくと、人間が自分の力でこの契約を守ることはできないことに気づかされていくのです。

(9月 24日)「出エジプト記 19 : 10~19」

**シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。**

(出エジプト記 19 章 18 節)

- ・神さまはモーセに、民を聖別し服を洗わせ、三日後にあわせて準備をするように伝えさせます。この「民」というのはイスラエルの 60 万人全員ではなく、「~の長」と呼ばれるいわゆるリーダーたちのことでしょうか。
- ・山を聖域として民に近づかせないこの描写は、日本の比叡山や高野山といった「自然崇拜」に近い考え方にも見えます。しかし聖書がここで伝えたいのは、「神さまに不用意に近づくな」ということなのでしょう。
- ・神さまに出会うためには身を清めないといけないというのも、神社の手水舎(手を洗うとこと)を思い起こしてしまいます。清くなければ殺されてしまう。清くなければ神さまに出会えない。その考え方は、キリスト教とは大きく違っているように思います。

(9月 21日)「出エジプト記 18 : 13~27」

全イスラエルの中から有能な人々を選び、彼らを民の長、すなわち、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長とした。

(出エジプト記 18 章 25 節)

・エジプトを出発したイスラエルの人々には、様々な困難が降りかかってきたことでしょう。聖書に書かれている水やパンの問題だけでなく、人々同士の争いや日常の困りごとまで、60 万人もいるのですからたくさんあったと思います。

・モーセは最初、それらすべてのことに耳を傾けていました。その結果、民は朝から晩までモーセのそばに立って、待っていたようです。その様子を見て助言したのが、しゅうとであるエトロでした。

・彼はいくつかの種類の人々の長を任命し、小さな裁きは彼らに任せるようにと言います。そして難しい問題だけモーセ自身が裁くようにアドバイスします。教会を始めとする多くの組織は、この考えの元に成り立っているようにも思います。

(9月 22日)「出エジプト記 19 : 1~6」

あなたたちは見た わたしがエジプト人にしたこと また、あなたたちを鷲の翼に乗せて わたしのもとに連れて来たことを。(出エジプト記 19 章 4 節)

・この 19 章には、とても大切なことが書かれています。それはイスラエルの人々がエジプトを出てから三度目の新月の日のことでした。彼らはシナイ山の前に宿営します。

・シナイ山はシナイ半島のかなり南側です。地図を見る限り、彼らは随分遠回りをして進んでいるようにも思えます。しかし平地には原住民も多かったと思われるので、彼らを避け、山が多くある南側を進んだのも無理のないことだと思います。

・モーセがここで山を登ると、神さまの声が聞こえました。それは、「わたしに聞き従い契約を守るなら、あなたがたはわたしの宝となる」というものでした。つまりお互いが義務を負う「双務契約」を提示されたのです。

(9月 7日)「出エジプト記 14 : 19~25」

モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。

(出エジプト記 14 章 21 節)

・神さまは雲の柱をイスラエルの人々とエジプト軍の間に移動し、両軍の接近を拒みます。雲の柱の中には、神の使いがいたようです。そしてついに、モーセが葦の海に向かって、手を伸ばすときがきました。

・「十戒」と聞くと、チャールトン・ヘストン出演の映画を思い浮かべる方も多いでしょう。(中森明菜の歌を思い出す人もいます)。映画の中で、モーセが手を伸ばし、海が割れるシーンは圧巻でした。

・水は壁のようにそびえたち、中には魚も泳いでいました。まるで水族館です。そのような状況で先を急ぐイスラエルの人々。そして追うエジプト軍。追う方も追われる方も、不気味だったに違いありません。

(9月 8日)「出エジプト記 14 : 26~31」

モーセが手を海に向かって差し伸べると、夜が明ける前に海は元の場所へ流れ返った。エジプト軍は水の流れに逆らって逃げたが、主は彼らを海の中に投げ込まれた。(出エジプト記 14 章 27 節)

・葦の海を進んでいる間、神さまはエジプト軍をかき乱されました。そのためエジプト軍の中には、「もう逃げよう」という声をあげる人もいました。しかし神さまはモーセに次の指示を出させます。

・モーセが次に手を伸ばすと、海の水が元に戻るといいます。それはエジプト軍の死を意味していました。ファラオの軍隊も含め、すべてが海の底に沈んでいくのです。このような旧約の記述を、わたしたちはどう受け取ればよいのでしょうか。

・実はエジプトの歴史書に、出エジプトのことは書かれていないそうです。60 万人のイスラエルの人々がいなくなり、ファラオが亡くなったのにも関わらずです。聖書は神さまの偉大さを伝えるために、このような物語を載せたのでしょうか。

(9月 9日)「出エジプト記 15 : 1~18」

主はわたしの力、わたしの歌 主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。

(出エジプト記 15 章 2 節)

- ・エジプト軍が海に沈められたのを見て、モーセとイスラエルの人々は歌を歌いました。「何を呑気な」と思うかもしれませんが、たとえば詩編も歌ですし、マリアの賛歌やザカリアの預言も歌です。
- ・神さまを賛美したり、神さまに感謝したり、そのようなときに「歌」が歌われます。そしてこれらの歌は、信仰告白とも言えます。「この方こそわたしの神、わたしは彼をたたえる」という言葉は、モーセの信仰を現わしているのです。
- ・ただこの歌の中には、ペリシテやエドム、モアブやカナンという名称が出てきます。モーセはエジプトの近辺にずっといました。ですからこの歌は、いろいろな伝承が混ざり合っているとも考えられています。

(9月 10日)「出エジプト記 15 : 19~21」

アロンの姉である女預言者ミリアムが小太鼓を手に取ると、他の女たちも小太鼓を手に持ち、踊りながら彼女の後に続いた。

(出エジプト記 15 章 20 節)

- ・ここでアロンの姉であるミリアムが登場します。アロンはモーセの兄と書かれていたので、ミリアムはモーセの姉にもなると思いますが、聖書はそのことについて何一つ言及していません。
- ・当時戦いから帰ってきた男性を、女性たちが歌い踊りながら出迎える習慣があったようです。彼女が手にしていたのは新共同訳聖書では「小太鼓」と書かれていましたが、新しい聖書では「タンバリン」になっています。
- ・アロンはレビ人で、祭司の一族でした。そしてその姉ミリアムは、「女預言者」だったそうです。イスラエルにおいてこのきょうだいは、とても重要な役割を持つ人たちだったようです。

(9月 19日)「出エジプト記 17 : 8~16」

モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。

(出エジプト記 17 章 11 節)

- ・エジプトを出たイスラエルの人々ですが、もともとシナイ半島に住んでいる民族からすると、脅威だったことでしょう。60 万人もの人たちが一度に移動しているのですから、彼らの動向は監視されていたかもしれません。
- ・レフィディムにアマレク人が来て、イスラエルの人々と戦いました。彼らは何故、イスラエルの人々と戦おうとしたかは書かれていません。ただ自分たちの土地に勝手に入ってきて荒らされると面白くないという感情は、分かるような気がします。
- ・戦いは奇妙な形でおこなわれます。実際に戦いを率いたのはヨシュアですが、モーセは丘の頂で手を上げていました。モーセが手を上げると優勢に、下げると劣勢になったので、モーセを座らせ、両手をアロンとフルが支えたそうです。変な戦いです。

(9月 20日)「出エジプト記 18 : 1~12」

モーセのしゅうとエトロは焼き尽くす献げ物といけにえを神にささげた。アロンとイスラエルの長老たちも皆来て、モーセのしゅうとと共に神の御前で食事をした。

(出エジプト記 18 章 12 節)

- ・モーセのしゅうと（妻ツィポラの父）であるエトロが、ツィポラとその二人の息子を連れてモーセの元にやって来ました。エジプトからイスラエルの人々を救う際、モーセは妻と子を実家に帰していたようです。
- ・エトロはミデヤンの祭司でした。聖書的にいうと、「異邦人の祭司」、「異教徒の祭司」ということになります。しかしエトロは「主はたたえられますように」とイスラエルの神さまに感謝し、いけにえをささげます。
- ・さらにエトロは、モーセ、アロン、イスラエルの長老と共に食事をします。ユダヤの人々は、異邦人や異教徒と食事をすることはありませんでした。この食事は、極めて異例な出来事だと思われる。

(9月 17日)「出エジプト記 16 : 28~36」

イスラエルの人々は、人の住んでいる土地に着くまで四十年にわたってこのマナを食べた。すなわち、カナン地方の境に到着するまで彼らはこのマナを食べた。  
(出エジプト記 16章 35節)

・神さまは、またしてもモーセの言うことを聞かず、7日目の安息日にパンを集めに行った民を見て言われました。「あなたがたはいつまでわたしの戒めと教えを拒み続けて、守らないのか」と。モーセはいつも間に入って、気の毒です。

・イスラエルの人々はこのパンを、「マナ」と名付けます。それは「コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味」だそうです。この正体が何か、いろいろな説があります。キノコ説、穀物説、果実説、樹液説、虫の排泄物説などなど。

・イスラエルの人々はこのマナによって、荒れ野での40年間養われていきます。(ここで40年とあるので、「彼らはかなりの長期間荒れ野にいるんだ」と分かってしまいます)。この出来事から、神さまから与えられるみ言葉や恵みを「マナ」と表現することもあります。

(9月 18日)「出エジプト記 17 : 1~7」

彼は、その場所をマサ(試し)とメリバ(争い)と名付けた。イスラエルの人々が、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い、主を試したからである。  
(出エジプト記 17章 7節)

・モーセたちはシンの荒れ野を出発します。聖書についている地図で見ると、シナイ半島の真ん中より南側にある、山が多い地域にあることがわかります。そこからレフィディムに向かうのですが、そこがどこなのかは分かっていません。

・イスラエルの人々はまた「水を飲みたい」と言い出します。出エジプト記にはこのように、困難なことがあるたびに不満を言う民の姿が描かれますが、それはわたしたちの姿かもしれません。

・モーセは民の長老たちを連れ、神さまが命じたように杖で岩を打ちます。するとそこから水が出ました。神さまにすべてを委ねることで、試しと争いから逃れられたのです。

(9月 11日)「出エジプト記 15 : 22~24」

マラに着いたが、その水は苦くて飲むことができなかった。こういうわけで、その名はマラ(苦い)と呼ばれた。  
(出エジプト記 15章 23節)

・エジプト軍から逃れ、イスラエルの人々はシュルの荒れ野に入っていきます。荒れ野は聖書によく出てくる場所で、岩がゴツゴツした何もない寂しい場所です。人が長期間、いることができる場所ではありません。イエス様が40日間、悪魔の誘惑を受けたのも荒れ野です。

・また荒れ野には、「神さまを感じるができる場所」という側面もあったようです。洗礼者ヨハネは荒れ野で宣教をしまし、イエス様もたびたび荒れ野で祈りました。何もないからこそ、神さまの恵みを感じる事ができたのです。

・しかしイスラエルの人々は、荒れ野で不平を言います。飲み水がなかったからです。あるのは苦い水だけ。水は命を維持するのに、必要不可欠なものです。彼らの不平は、間違っているのでしょうか。

(9月 12日)「出エジプト記 15 : 25~27」

彼らがエリムに着くと、そこには十二の泉があり、七十本のなつめやしが生っていた。その泉のほとりに彼らは宿営した。(出エジプト記 15章 27節)

・モーセが神さまに示された木を水に投げ込むと、水は飲めるようになりました。木によって水が浄化されたのでしょうか。それよりも、神さまが大いなる業が、ここに示されたと純粋に捉えたいと思います。

・ここで「主は彼に掟と法とを与えられ」とあります。まだ十戒は与えられていませんので順番的におかしいと思います。伝承が前後したか、十戒は荒れ野に入ったときから有効だったのだと伝えようとしたのか、ということでしょう。

・神さまは「その掟をすべて守るならば」と言います。掟を守った人とだけ、神になる契約を結ぶということです。旧約ではこの考え方がベースになっています。しかしこれを覆し、新しい契約(新約)を与えられたのがイエス様でした。

(9月13日)「出エジプト記16:1~5」

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。」

(出エジプト記16章4節)

・「水が飲めない」とモーセに不平を言ったイスラエルの人々は、次に「食べ物がない」とモーセとアロンに不平を言います。荒れ野は植物も水もほとんどない砂漠のような場所ですので、これを「わがまま」と捉えるのは少し酷です。

・神さまはそのイスラエルの人々の不平を聞き、天からパンを降らせることを約束されます。このパンは「マナ」と呼ばれ、これから先イスラエルの人々が荒れ野にいる間、彼らを養う物となります。

・ここで「わたしの指示どおりに」と書かれた箇所が、新しい聖書では「私の律法に従って」と変わっています。荒れ野での生活に対しても、神さまはすでに律法を与えられていたという解釈になっています。

(9月14日)「出エジプト記16:6~10」

アロンはイスラエルの人々の共同体全体にそのことを命じた。彼らが荒れ野の方を見ると、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。

(出エジプト記16章10節)

・イスラエルの人々の不平を、神さまは聞かれました。ただ生死に関わることで、不平というよりも、嘆きや叫びの方がしっくりくるような気がします。神さまは夕方には肉を、朝にはパンを与える約束をされます。

・モーセは繰り返し、「わたしたちを一体何者だと思っているのか」と人々に言います。自分たちにはどうすることも出来ない状態なのに、不平を言われても困るというのはよくわかります。

・神さまは人々の言葉を聞き入れたしるしとして、「主の栄光」を現わされます。主の栄光は朝、雲の中に現われるのですが、どのようなものなのでしょうか。光でしょうか。風でしょうか。それとも炎でしょうか。

(9月15日)「出エジプト記16:11~21」

しかし、オメル升で量ってみると、多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた。

(出エジプト記16章18節)

・神さまはまず夕方に、うずらを与えられました。うずらは日本でも食用として用いられていたようです。またうずらの卵は燻製にしても美味しいです。ただ60万人が食べる量ですので、相当な数がやって来たのでしょう。

・そして朝になると、地の上の霜のように薄く細かいものがうっすら積もっていました。モーセは「これがパンだ」と告げます。そして1人当たり1オメル(2.3リットル)ずつ取るように命じます。総計138万リットルです!

・モーセはそれを、翌朝まで残さずにその日のうちに食べるように言いました。しかしその言葉を守らない者も出ます。モーセはその人たちに対して怒りました。モーセの言葉をまだ、神さまの言葉として受け入れてないようです。

(9月16日)「出エジプト記16:22~27」

七日目になって、民のうちの何人かが集めに出て行ったが、何も見つからなかった。

(出エジプト記16章27節)

・のちに十戒で与えられる安息日の規定が、すでにこのときに命じられています。安息日は天地創造の際、神さまが7日目にすべての業を終えて安息されたことに由来します。人々はその日を聖なる日とします。そしてすべての働きから解放されるのです。

・荒れ野でも、6日目に二倍のパンを集め、半分は前の日に焼いたり煮たりして保存しておくようにしなさいとモーセは命じます。7日目に何も労働をしないでいいように、準備しておくのです。

・他の日であれば翌日には腐っていたパンも、このときは一日置いても臭くなることはありませんでした。神さまがそのようにされたということでしょう。しかしこのときも、モーセの言葉に反し、7日目にパンを集めに行く民がいたようです。